

Title	レオンの夏
Author(s)	森本, 久夫
Citation	Estudios Hispánicos. 1978, 4, p. 75-87
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/97879
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

レオンの夏

森 本 久 夫

1977年7月18日マドリーのバラハス空港に到着したのは予定より約1時間遅れて午後5時すぎだった。ローマに負けず、暑さがじんとしみてくる。ここに昨年より留学中の宮本君が出迎えてくれた。長髪で陽焼けした彼におどろいた。学生22名にカルバホさんと私の合計24人の団体である。カルバホさんはポーターに荷物を依頼するとレオンから私たちを迎えにきているはずのバスをさがしに出かけていった。私はポーターに荷物の置き場所を決めてほしいと言われ、手にもっていたショルダーバッグを両替所の前に並んでいるA君にたのみ、チップ代にペセタが要るのでBさんに両替を頼んでおいてポーターについていった。外に出るとカルバホさんの姿もバスも見当らない。止むを得ず、空いたところに荷物を置いてもらうことにした。盗まれてはいけないので番をすることにした。やがて学生たちが宮本君と連れ立って出てきた。バスもやってきた。荷物をバスの下部のトランクにつめ、さて出発となり、A君に私のショルダーバッグをときくと、忘れてきたという。あの中にはみんなの帰途の航空券、旅行の一切の書類、私のパスポートと所持金のすべてが入っている。ある人からあずかった1000ドル余も入っている。どうしよう。一瞬あわてずにいられなかった。とにかく、もう一度中に入れてもらってさがさねばならない。両替所の前まで戻った。人気のなくなった窓口の足許に黒いショルダーバッグが一つ残っていた。ローマでは手許に持っているものでも盗まれるといわれていただけに、ほっとすると同時に、なにかふしぎなような気もした。そして、私は7年ぶりに昔とかわらないイスパニアに戻ってきたんだという実感が湧いてきた。

バスには運転手の他に50代の紳士ホセ・ブラガード氏が乗っていて、カルバホさんと知り合いのようであった。すでに3人の客がいたが、ブラガ

ード氏によると、それは同じ夏期講座に行くイギリス人の先生と学生だということだった。先生は私と同世代の陽焼けしたスポーツマンらしい体格の人だった。マドリー・ガランとって、それから1ヵ月私と同じホテルで毎日親しく交際することになった。

マドリーを出発したときはもう6時をまわっていた。しかしイベリア半島のこの時刻はまだ陽が高く昼下がりの感じだ。空港と首都の中間の以前野っ原だったところに建物がたくさん建設中なのにおどろいた。バスはヘネラリシモ通りを少し北上し、モンクロアから大学都市を通過して一路カスティージャ平原をレオンに向かった。プエルタ・デ・イエロを出たところから7年前と少しも変らない景色が始まった。トンネルを抜けてグアダラマ山脈を通過したところでバスは止まり、バーで休んだ。私は早速カフェ・コン・レチェを注文した。白いカップに入った熱いミルクコーヒが来た。のどにしみた。バーの前の通りに出て車の流れを見た。ここをなん回か通過したときのことを思い出した。朝は北へ向かって、夕べはマドリーに向かって、いつも朝か夕方だった。今度は夕方だ。しかし今度はちがう。西に傾いた陽をうけてこれから北へ向かうのだ。

バスはひた走りに走った。夕陽が大きな黄色っぽい輪郭を私の網膜に焼きつけて地平線に消えた。まえにエストレマドゥーラで同じような入り陽を見たことがある。あのときは急に夕闇のせまった平原に牛がな草をはんでいたっけ。いつの間にかバスはヘッドライトをつけて走っている。私はブラガード氏と並んで坐った。

彼はレオンについて語ってくれた。レオンには山岳地帯と平原地帯の二つがある。川は36あり、中でも大きいオブリゴ、エスラの両川はドウエロ川に注いでいる。これらの川ではにごい、ボガ（こい科の魚）、ますなどが釣れる。とくにますは美味だ。最近これらの川からの灌漑あるいは地下水の汲み上げによって、また機械化によって農業が非常にすすんできた。小麦を中心とする穀物、ガルバンソ、いんげんなどの豆類、レタスなどの青菜類、じゃがいもなどのいも類とほとんどの農産物を産出する。油をとるためにはひまわりが栽培され、砂糖をとるために砂糖大根が作られる。しかし、オリーブや砂糖きびは栽培されない。ごまも見当らない。たぶんこの地方の涼しい気候のためだろう。ろばは農村で脱穀にはまだ使用されているところがあるが、人の移動にはあまり見掛けなくなってきた。自動車

の普及が著しい。肥沃な土地でありながら水不足のために作物ができなかったところが多かったが、川にダムを建設することによって立派な耕作地に変わったところが多い。エスラ川に行くと、川をはさんで、緑の多い耕作地と赤茶けた土地が見られるからその点がよくわかるだろうという。のちにバレンシア・デ・ドン・フワンに行ったとき、実際にそれをこの眼で確認することになった。

ビリャモンタンはカルバホさんの生まれ故郷である。レオン市の南西数十キロのところにある村である。レオンでの生活も20日余りたった8月10日カルバホさんの運転する車で出かけた。その時のことをレオン地方の農村の一つの姿の例として誌しておこうと思う。

道中今も残存するというマラガートと呼ばれる人びとのことを話題にしながら走った。ホップ畑が多かった。オブリゴ川の岸辺で昼食をとった。カルバホさんの妹さんと、弟さんの奥さんが食事を準備してくれた。澄んだ川では泳ぐ人もおり、岸の草の上では寝そべて日光浴する人もいる。私は水辺でただよってきたビーチボールをとろうとしてすべりかけ、そばの草をつかんだところ、むき出しの腕に一瞬鋭い痛みの走るのを感じた。とげがささっているようでもない。ふしぎだった。そばにいたカルバホさんに言うと、彼は笑いながら、この草に触れたのだらうという。今に腫れてくるという。その通りになった。オルティーガという草だった。高橋先生の辞書によって刺草であることを知った。帰国してから図鑑で西日本にも自生することを知った。

ビリャモンタンは現在 200人ぐらいの村だった。貧しそうな村だった。人気の絶えた通りを野良の方へ大きな車輪二つの車を引いて牛が通っていた。私はカメラにおさめたくて自転車借りてそのあとを追った。家並みのはずれたところで車は止まり、牛は道端の溝の水を飲んだ。牛の手綱をもっていた老婆は愛想よく被写体になってくれただけでなく、この村をどう思うかときく。静かだというと、「静かです」となん度もうなづいていた。

カルバホさんの弟さんの奥さんの実家に行った。おばあさんが自分のお母さんが手づから刺しゅうしたというスカートを見せてくれた。もう1世紀になるという。この地方の女性の民族衣裳を出して女の人們がそれを着て見せてくれたので、中庭でカメラに納めっていると中年の男性が2人入

ってきた。ひとはこの家の主人、ひとは8年前マドリーで会おうとして会えなかったカルバホさんのいここになるフランコ神父だった。初対面なのにはじめてのような気がしなかった。この2人にカルバホさんのもうひとりの弟のペベ神父が一諸になって畑のあぜ道を辿りながらこの村の様子について説明してくれた。部落を出て南へまっすぐな道がつづいている。これは古代ローマの時代に人びとがエストレマドゥーラまで旅したところだという。今は荷車が通るだけの野道になっている。道端の緑地で牛の群が草をはみ、木の下で老人が坐って木の枝にかけたポータブル・ラジオをきいていた。フランコ神父が、「あんたより先に、日本はもうこの村に侵入してきている。」

というので、その老人のところへ出かけて行った。ラジオにはサンヨーのマークがついていた。

遠くまでつづく平原にはガルバンソ、砂糖大根、とうもろこし、じゃがいもなどが植わっていたり、穀物の刈り取ったあとだったりする耕作地にまじって、多くの雑草のおい茂っているところが見られた。それはこの村を去った人びとの耕作地だったところだという。以前はもっと多くの人に住んでいた。ところが若い人の多くが大都市へ出て行き、荒れ地が増えてきたという。わが国と同じ状況がここにある。

畑のあちこちに放置された井戸があった。以前ポンプの据えられていた跡がある。この辺は川が地下にもぐっているのので、こうした井戸から地下水を汲み上げ灌漑に使っているという。土地の所有者が去り、井戸も放置されたままになっているのだ。パイプだけが土中からつき出ているところにも行った。そこからはこんこんと澄み切った水が湧き出しており、その足許からのびた用水溝を流れていく。畑の境界線に沿って用水溝はどこまでもつづいているようだった。飲んでみよというので口をつけたが、冷たくておいしかった。90メートルほどボーリングされているそうである。今はこのようなパイプから噴出する水で作物を栽培し、村人の用も足しているという。

その日はカルバホさんの亡くなったお母さんの聖人の日なので、村の教会で親族でミサにあずかることになった。礼拝堂の上へのぼり、カルバホさんの義弟によって久しぶりに鐘が鳴らされたとき、その音は静寂のたちこめた村をつき抜けてどこまでも響いていくような気がした。夕暮れの迫

まった遠くの建物の上をこうのとりが飛んだ。ペペ神父がミサを挙げ、甥のホセ・ルイス少年が侍者をつとめた。この教会には以前は司祭が住んでいたが、村人が減ったため、司祭は他の村とのかけもちで、祝日にだけミサを挙げにくるという。鍵は近所の家が保管しているという。

ミサのあと家路につく途中、野良から帰ってきた牛の群に出会った。彼女らはそれぞれの家に首につけた鈴を鳴らしながら入っていく。まるで学校帰りの子供たちのようだ。それからいくばくもせず、こんどは羊の群が帰ってきた。数も多い。羊飼いは棒切れでたたきながら羊を分けていく。羊の背には焼印がついている。それにしてもこの数の中から分けるのは大変だと思うが、またたく間に各家に入れる羊を分離してしまった。群からはみ出そうとする羊もいる。しかし、そこにはちゃんと番犬がいて、一声吠えたと元のところへ羊は戻ってしまう。その有能ぶりには感心した。彼らの群が去ったころ、あたりはすでに夕闇に包まれていた。土と石、れんがでできた家々からは灯もあまりもれず、すっかり街路は暗くなった。そして気づくと星の数の多いこと。もうなん年もこんなにかくさんの星に出会っていないことに気づいた。フランコ神父は言った。

「あなたの泊まっているホテルは二つ星だろう。あの星の一つ取ってホテルの壁につけたらどうだ。少しは待遇はよくなるよ。」

レオンでの夏期講座は7月19日オビエド大学獣医学部の講堂で市長や司教臨席のもと、シカゴ大教授リカルド・グリョン氏のホルヘ・ギリエンについての講演をもって開始され、8月13日までの28日間つづいた。外国人の受講者は日本人、イギリス人、フランス人、アメリカ人たちだった。日本人が大半を占めた。外国人は初級、中級のクラスにわかれて授業をうけた。また上級クラスとして毎日1時間講演があり、それには一般市民も自由に参加できた。第1週は上記グリョン博士が現代文学について語り、第2週はチューリッヒ大教授エウヘニオ・デ・ノラ博士が1960年代のイスパニアの作家たちについて、第3週はバレンシア大教授アンヘル・ライムンド・フェルナンデス・ゴンサレス博士がブエロ・バリエホの演劇について、第4週はフランシスコ・マルティネス・ガルシア博士がセサル・バリエホの詩についてそれぞれ1週にわたり語った。不幸にも私はその講演のある時間に授業を担当させられ、2度ほどしか受講できなかった。しかし当地

の新聞に出た要旨などからラテン・アメリカ文学にこれらの講演者は関心をもっていること、ここ数年小説も詩もイスパニア自身は沈滞しているという意見のようだった。毎日授業は午前中3時間行ない、午後は見学や遠足にあてられた。最初の1週間は午後自由だったが、残りの3週間は3日にあらず見学か遠足といった感じだった。

レオンに到着したのは午後11時、カテドラル近くのホテル・パリに落着いて荷物を置き、近くの喫茶店ビクトリアでガラン氏とコーヒを飲んで部屋に帰ったときはもう真夜中をすぎていた。翌日からレオンでの生活が始まったのだが、大体午前7時から8時ごろ起床。9時ごろ朝食。学校へ出かける。途中、送り物のあるときは郵便局へ、換金のときはイスパノアメリカ銀行へ行き、校門のそばの「ピサ」という書店が開いているときはそこをのぞく。事務局にはチャロという大学4年を終えた女性がアルバイトでタイプを打っている。彼女としゃべっている間に2時限を終えて教官たちが戻ってくる。ロンドンでイギリス人にイスパニア語を教えた経験のある冗談好きなホセ・マヌエルさんを中心に、新婚みたいなフストさん、ちょっと太っちょのマルティンさん、フランス語が堪能でフランス人担当のロペスさん、それにガラン氏たちである。みな若い人たちばかりだ。事務局にはチャロ以外に銀行員が本職のペペ（ブラガード氏）や秘書のドン・ラファエルがおり、ときたまディレクターのドン・エミリオが姿をみせられる。この人は師範学校の先生だったとか、とても話の上手な人で見学に行ったときはいつも説明をされ、私に通訳の役を要求された。絵もうまく、知らぬ間に紙片にだれかの似顔絵ができ上る。教官たちは3時限に入るまえにきまってバーへコーヒを飲みに行く。私は11時45分から12時45分までの1時間初級の人にとってイスパニア語の文法で解らないところを説明する。放課後もきまって教官連中は連れだって近くのバー「ベネシア」か「ミラン」へ行って白ぶどう酒を飲んでしゃべる。そのあと私はガラン氏と昼食をとりホテルに帰る。途中別のバーに寄ることもある。最初のうちはこの都市ではまだ東洋人が珍しいのか裏町などを通るとわざわざ運転している車を止めてじっとこちらを眺めている人もいた。それに馴れるのに半月はかかったろうか。その点ではマドリーでの生活は気楽だったと思う。ガラン氏と一諸に昼食をとる。覚二さんが来てからは3人で同じ食卓を囲むことが多かった。昼食後私はきまって4時か5時ごろまでベッドに入っ

た。この地方の人はシエスタの習慣はないという。でも夜の遅いここの生活のペースに合わせるためには私は昼寝せずにはいられなかった。ところがガラン氏はいっこう昼寝はしない。毎日のように「カシーノ・デ・レオン」というクラブのプールに泳ぎに出かけた。私はここでの気温が非常に低く感じられ泳ぎに行く気がしなかった。ペペに教えられた「Hasta el cuarenta de mayo, no te quites el sayo.」という諺どおりに思われた。とくに太陽のあたらない所は涼しかった。高原のためなのか。北にそびえるヨーロッパ連峰のためだろうか。昼間半袖姿でも夜間は長袖の方がよかった。今年とはくべつだったそうだが、宮本君と3日間のガリシア旅行からレオンに帰ってきた7月30日の夜はまるで冬の最中のような寒さだった。

午後4時ごろからふたたび商店は開く。遠足や見学の無い日は人を訪問するか本屋まわりをした。サント・ドミンゴ広場にある「パストール」という本屋が一番大きかった。残念なことに私のほしい歴史関係の本はあまりなかった。あるときチャロとその友人モンセが同じように大学で歴史を専攻しているので一諸に本をさがしに行ってくれた。店の主人の出すどの本もすでに私のもっている本だというと、あなたは歴史学者かときかれてしまった。覚二さんと出かけたときに、件の主人は、ところで最近日本でドン・キホーテの新訳が完成したときいたがほんとうかときくので、ほんとうだ、あの人のお父さんが完成したのだと覚二さんを指さすと、そんなに偉い人の息子さんかと目を丸くした。

午後9時半ごろまで太陽は空にあって明るい。夕食は10時ごろからとる。私たちのくらししたホテルは二つ星で手ごろなのか、よく昼食や夕食が団体に食堂を占領されて待たされたり、食堂でとれずに隣のバーの一隅で食べさせられたりした。近郊の人たちの結婚披露のパーティだったり、サンティアゴへの巡礼団だとのことだった。夕食もガラン氏、覚二さんと一諸のことが多かった。食後バーで私はコーヒ、あとの2人はアルコールを飲むか、時には外に出て、「バーリオ・ウメド」と呼ばれる飲み屋の多いところを散歩したりした。私はもっぱらバーでカフェ・コン・レチェを飲んだが、学生たちはディスコテカに行く者が多かった。どこの都市へ行ってもディスコテカが賑わっているようだった。バレンシア・デ・ドン・フワンで一度のぞいたが、私には騒々しすぎる。ダンスになじめない私には魅力は感じられなかった。しかし、あるときこの大学生と話したとき、なに

が一番好きかときくと、スピードとダンスで、免許証なしで単車をのりまわしたのが最初で車を乗りまわしている、ダンスはディスコテカですという。いずれも同じ傾向があると思った。

レオンのバーで飲みおぼえたものに花の香りのするマンサニーリャという茶がある。胃腸にいいという。日本茶に似て気に入った。

このレオンの都市について少し誌しておこうと思う。人口十数万の都市でレオン県の首都である。都市の規模は大きくないが、よく整備されているようだ。小高い処にイベリアのゴシック建築の代表作として有名なカテドラルがあり、そこからヘネラリシモ通り、サント・ドミンゴ広場、オールドーニョ2世通りと中心街がまっすぐにベルネスガ川近くのグスマン・エル・ブエノ広場に至る。ここでオールドーニョ2世通りと直交する遊歩道があり、一端はサン・マルコスのホテル、他の一端には闘牛場がある。サン・マルコス、グスマン・エル・ブエノ間の川向かいにレオン駅があり、その北西にかけて住宅街がのびつつあるようだ。また反対側の闘牛場より南の郊外に工場群が増大しつつある。カテドラルの南へ数分歩けばプラサ・マヨールがあり、サント・ドミンゴ広場の南側に市役所がある。プラサ・マヨールとその市役所にはさまれた部分がパーリオ・ウメドと呼ばれる一画で、飲食店が多い。そのため「ウメド(湿った)」と言われるのだろうか。レオン市で一番古く、一番賑やかで楽しいところとされている。食料品店、靴屋、衣料品なども並んでいる。夜の女の出没するところもある。プラサ・マヨールでは水曜と土曜の朝に市がたつ。いろんな野菜が売られる。私たちに珍しかったのは女性が手に生きた兎や鳩や鶏をもって売っている姿だ。

私の泊まっていたホテルはヘネラリシモ通りに面しており、カテドラルとサント・ドミンゴ広場の中間で、どちらに行くにも2、3分というところ、道路をへだててパーリオ・ウメドである。最初まだ方角に疎かったころはカテドラルの塔をめざして歩いた。あるときこの都市の婦人と話していて、レオンの人も同じようにすることを知った。カテドラルはみんなの目印になっているようだ。

この都市は歴史的にはアストウリアスから南下してきたキリスト教徒の王たちがここに10世紀かつてのローマ時代の都市跡に都を建設した。カテ

ドラル近くに残存する城壁の一部は当時のモサラベたちによるものとされている。ここから28キロばかり東にあるサン・ミゲル・デ・エスカラーダの修道院は同じようにモサラベたちが建設したものである。材料はこの地方のローマ時代の建造物の一部が利用されたという。その証拠にみがき上げられた大理石の柱がそのまま使われている。ペペの指摘によると、職人たちは柱の上下をまちがったのであろう。1本だけ他の柱とちがって土台であるはずの様子が柱頭に使われている。でも、もうすでになん百年もそのまま来たのだ。それでいいではないかと思った。チャロが外廊の柱の一つを指さして言った。

「みてごらん。心ない若者がナイフで傷つけたのよ。」

私は広隆寺の弥勒菩薩像やバチカンのベルニーニの聖母像、アムステルダムのレストランの「夜警」などを思わざるを得なかった。

レオン市はレオン王国の首都であっただけでなく、中世以来有名なサンティアゴへの道筋にあたっている。そのためこの道とかかわりのあるものが多い。まず第1にこの道を通じてピレネーの彼方から入ってきたというロマネスク様式がある。この都市のサン・イシドロのバシリカはその代表だ。のちのゴシックの建造物と比べると小さいけれど、それ以前の西ゴートの建造物と比べると非常に大きい。ここにはレオンの王たちの霊廟があったし、セビーリャのサン・イシドロの遺骸がこの地に移されてまもない1063年彼にささげられた。もっばら宗教がテーマであったロマネスクのフレスコ画の中であって、1年12ヵ月の人びとの働く姿が描かれているものがあって、当時の生活がしのばれる。

ついで都市の中心的存在であるカテドラルは13世紀中葉から14世紀にかけての作品で、フランス・ゴシックの流れをくむ。それほど大きくないけれど、もっとも純粋なゴシック様式をそなえ、調和とステンド・グラスの美しさを誇っている。まるで教会全体がステンド・グラスにおおわれている感じだ。ある人にとるとそれは朝がもっとも美しく、ある人には夕方がもっとも美しい。

第3にサン・マルコスの修道院と付属教会がある。修道院は現在ホテルと博物館に使用されているが、かつてサンティアゴ騎士団のあったところである。この騎士団はカトラバ騎士団とともに中世にイスパニアで誕生した騎士団として有名であるが、サンティアゴへの巡礼者を保護するため

に生まれたという。正面はサラマンカ大学の正面と同じプラテレスコ様式の細かい浮彫りにおおわれている。付属教会のあちこちにサンティアゴ騎士団のマークであった赤い十字架印が見られる。またサンティアゴ・デ・コンポステラにゆかりのあるものには貝印のついているものも印象的だ。このように見ていくとレオン市は小さくても、中世から近世にかけての代表的建築様式が揃っており、とても参考になる。

その後政治の中心がカスティーリャに移ったためか、バロックその他の時代のものは見られない。

ところが現代になると、ふたたびいくつか惹きつけられるものが出現する。第1にアントニオ・ガウディーの作品である貯蓄金庫の建物カサ・デ・ロス・ボティーネス（1891-94）がある。白と黒を基調にした石造りのこの建物は方形で四隅は円筒状で黒いとんがり帽子のような屋根をもった出っ張りになっている。毎日なん回か見てくらししたが、その度におとぎの国のお城のような印象をうけた。正面玄関の上の怪獣を踏んづける騎士の像はきれいだ。新ゴシック様式といわれている。アントニオ・ガウディーの作品としてはアストルガの司教館も有名だ。もっと尖塔が多くて、もっとゴシック的だが、円筒形の部分はレオン市のものとも、バルセロナの聖家族の教会とも共通するものだ。

もう一つはベルネスガ川を越えて西方へ数キロ行ったところにある道の聖母の聖堂である。1960年に中世以来あった聖堂と同じ場所に建てられた新しい聖堂で、内部は柱をもたない機能的な大きな礼拝堂になり、抽象模様ステンド・グラスがはめられている。正面にはカタルーニャの彫刻家スピラックによる聖母を中心に12使徒のブロンズ像が立っている。それぞれの使徒はその特徴を表わす物をもつか表情を示している。ジャコメッティを思わせるようなやせ細った彫像群はおそらく余分なものを取り去ったときに生まれるものなのだろう。ところで、この聖堂で一番印象的なのは、そうした新しい彫刻や建造物そのものよりも、祭壇に見られるピエタの像だろう。若く美しい聖母、ときには息子であるキリストよりも彼を抱く聖母の方が若くみえるピエタに馴れた私たちの眼には最初奇妙にうつる。なぜなら、そこにみられるわが子を抱く聖母はしわのよった顔の女性だからである。しかしよく考えてみるとこれこそ自然ではなからうか。サンティアゴへ巡礼する道筋で人びとがひざまづいてきたのはこの若くない姿の前

だった。この道の聖母はレオンの守護聖人である。

ある日、田村君という教え子と夕暮れ近い街路を歩いていたら、

「先生、この近くにとってもきれいな教会がありますよ。一度行ってみませんか。」

と突然言い出した。それはカテドラルから少し南へ入ったところであった。正面のドアを押すと開くので中へ入った。ひとりの神父が一番うしろの椅子に坐わって祈っていた。私たちは祭壇前の席に坐わった。私は主の祈りをとなえてから祭壇屏を見上げた。高い天井まで描かれた大壁画だった。新しい描き方だった。物をこねる手、槌を握る手、原子をあらわすマークまである。中央はキリストにちがいない。礼拝堂の両側の壁には14枚からなるキリスト受難の道行きの絵が説明づきで並んでいた。暗くなった礼拝堂の中ではときにはもう文字が読めなかった。絵の内容から判読しながら辿っていった。辿り終えるとふたたび祭壇の前に戻っていた。私はもう一度祭壇屏の絵を自分の記憶にとどめようとして見入った。そのとき、いつのまにきたのか件の神父がちょうど灯をつけてくれた。しばらく眺めてから私たちは礼拝堂を出ようとするや街路からもうひとり背の高い神父が入ってきた。すると件の神父が、この人はこの教会の主任司祭だから、もし興味あるなら説明してくれる。イスパニア語がわかるかとさく。ちょっとならと答えると、もう一度ついて来いと言って祭壇前まで戻り、もう一度灯をつけてくれた。主任司祭はいろんなものを作る手の説明をしたあと、この絵はベラ・サネッティの作品で、作者が若いころレオンに住んでいたことから、無料でこの絵を描いてくれたことなどを教えてくれた。私たちはレオンの印象や日本のことを語り合っ別れたが、あとになってこの教会が聖なる職人イエズスという教会で、サネッティの作品ゆえにちょっとしたガイドブックなら一言触れていることに気づいた。田村君はもちろんそんな事を知らずにいた。近くに住んでいた絵画好きの彼が偶然ここを訪ね、この絵に魅せられ、夕方ここに来ていたのだ。そのおかげで私はこの絵に接することができた。

さきに農業に触れたが、それに関連するものに牧畜がある。レオン県にとって牧畜は重要だ。バレンシア・デ・ドン・フワンに行ったとき、エスラ川にかかる橋で自動車が羊の群に出くわし立往生しているのを見た。バ

ルボルケーロの鍾乳洞を見に行ったとき、非常に高い山の斜面で草をはむ牛たちを見た。アストゥリアス地方へ下がる峡谷の峠道を通過するとき、けわしい山の岩かげに牧者の小屋を見たり、山羊の姿を見かけた。そのうちのあるものは野生の山羊だという。都市を出はずれて車を走らせると、きまってどこかでなな度か羊の群に出くわす。山羊がまじっていることもある。人にきいてみると、今もエストレマドゥーラまで移動する羊群はあるという。しかし大抵いまはトラックで輸送するという。もうメスタの時代ではなくなったのだ。でも牧畜は重要な産業にちがいない。その証拠に機械できれいに束ねられた藁や牧草をいたるところで見かけた。

7月27日計画されていた8回の遠足のひとつとしてルナ湖へ出かけた。ダムによってできた人造湖である。このダムは他のダム同様多目的ダムでその主な目的は発電と灌漑である。技師の説明によるとイスパニアはフランス、ポルトガルと電力の補完をし合っているという。イスパニアでは夏に雨が少なく、冬割合多い。フランスやポルトガルはその反対だから、イスパニアは夏、両国から送電してもらい、冬期両国に送電するという。差引イスパニアから両国に送電する量の方が送電してもらう分より大きいという。このレオン県は石炭を多く産出する。ルナ湖の発電所は火力発電所もっており、そこも見学させてもらったが、燃料はすべてこの地で掘り出される石炭である。イベリア半島の北に炭鉱が多く、雨も多いため発電の中心もここにある。私たちの見学した発電所ではイギリスや自国で製造した機械が使用されていたが、レオン県にある別の発電所では日本製（三菱）の機械を使用しているとのことだった。発電所内はすべてリモートコントロールされており、広い発電所内で人のいるのはコントロール室だけである。

子供たちには国境はない。とても親しみやすい。発電所の職員の子供たちはすぐ学生たちと一語にきゃっきゃいいながらゲームをする。別れるときバスのところまで送ってきて手を振った。

「バスで一諸に行こうよ。」

といったら、

「日本までは行かない。」

とって笑った。みんな笑った。無心に私たちに手を振ってくれているこの子たちはいつの日か父のようにこの発電所で働くのだろうか、それともやっぱり他のところの若者同様大都会へ出ていってしまうのだろうかと

考えずにいられなかった。

8月13日夕方7時開講式が行なわれたのと同じ講堂で閉講式が行なわれた。カルバホさんや覚二さんと一諸に私も壇上に坐らされたのにおどろいた。式後ホセ・マヌエル夫妻とバーのテラスでぶどう酒を飲んで別れた。そのあとフスト夫妻やガラン氏とバーをまわった。フストさんは私のためにレオンの記念にとバーの主人に灰皿をたのんでくれた。主人は三つもくれた。

その日の朝マルティンさんは黙って「セレスティーナ」を私の膝の上においていった。あとでもどしに行くと、それはあなたにあげたんだという答えがかえってきた。いかにもおとなしいマルティンさんらしいプレゼントの仕方だった。

翌朝まだ夜の明けない5時半に覚二さんと私はホテルをあとにした。6時半学部前から覚二さんとシモン・ゴメス神父様の率いる名古屋のグループとカルバホさんと私の率いるグループが一諸にバスに乗りこんで出発、サラマンカ経由でマドリーに向かった。左手の地平線に朝日をおがむころ、私たちはもうレオンの都市を遠く離れていた。(1977. 9. 12.)